

壯士

大關徳道

扉をばたんと閉めて便所を出た所マイル張りのだゞつ廣い便所の中に比べて外は意外に暗かつた。自分の閉めた扉の音が案外に強く響いたのでぎよつとした時、すつと黒い影が目の前を横切つていつた。點のやうな尾を引いて蟲が通つたのだつた。瞬間道夫は釘付けにされたやうに立止つて周圍を見廻したが、別に何事もなかつた。力が抜けたやうに眺めると十間程先の廊下のつき當りに常置燈があつて、こちらに通ずる道にくつきりとした影を落してゐる。あそこを廻つた所にさつき患者らしい人影がぼつねんと立つて居た。髪の亂れた三十位の女だつたが、精神病患者かと思はれるやうにどろんとした眼付の女だつた。まだ居るかなと胸をどぎつかせて廊下に出たが、女の影はなかつた。ほつとして足を早めはしたものの、突然横からその女が出て來さうな氣がして、手洗場の隅の黒い影が氣になつて仕方がなかつた。

猪吉の部屋に行つてやつと氣が落着いた。

「淋しいなあ」落着くとこんな言葉が出てしまつた。「うん靜かだ」と猪吉も僅かにうなづきながら、「靜かだけど、これでも色々な事が起つてゐるんだよ。廣い病院だから今死にかゝつてゐる人間がないとは言へないし、死ななくとも一部屋一部屋にその日の悲喜が交錯してゐると思つてごらん。大きい眼で眺めたら面白いだらうね」ひと頃の猪吉とは思はれないやうな落着いた口調でそんな事を言つた。「一人かね」と道夫が問ふと、「御覽の通り猫の子も居ない」と言つた。不由ぢやないかと思つてゐると、「いや俺は一人であたいんだ。この方が樂でいゝ、こつちに來てから實際すつとしたよ。」と猪吉は自分の辯解で自分を納得させるやうな口調で言ひながら、傍の藥紙を取り上げた。「いゝ句だつたが、毎日寝てゐながら、この紙で鶴を折るんさ。その鶴が毎日三羽づつ出來て行ふといふのだつたが巧い句だつた。忘れたのが残念

だ」口では残念だといつてもそんな氣振りは少しもなかつた。それよりか忘れたと言ふ方が却つて猪吉らしい所があつた。空白な雲が湧く限られた四角な窓。

仰向きになつて薬紙にこんな句を書いてよこした猪吉は、「こんな病室にぼつんと窓を見てゐる人間の氣分が出ればと思つたんだが愚作かな」靜かになつた猪吉の横顔を眺めながら何か言へば氣分が壞れるやうな氣がして道夫は黙つてゐた。

「棚の上にある葉書を取つてくれ」と言ふがまゝに道夫は取り上げたが、何氣なしに尙子といふ字が目についた。黙つて差し出しながら考へてみたがはつきり思ひ出せなかつた。誰かね、と聞くのも餘り小供ぢみてゐるし、こんな病室でそんな詮議めいた事を言ふ氣にもならなかつた。「氣になるかね」と覗き込むやうにして、「啄木のどつたか、猫を買へばそれが家の不和のもとよなるといふやつがあつたね。嫁と姑の仲が悪かつたさうだが、まあその猫といふのが尙子だよ、不和の原因つてのが尙子なんだが」「何とか言つたね、この名は」少しぎごちない問だつたが仕方なかつた。「ヒサと讀むのだ、まあいゝ名だらう」「あゝ」道夫は我ながらぼんやりした答へをするものだと思つた。

猪吉の祖父は豪農の類だつた。金をつめた長持に燈明あげて拜んだ時もあつたさうだが、この祖父が死ぬ頃から次々と不幸が続いた。村の者の話としては祖父があまり荒獵したそのたゝりで、矢部家の者が死ぬんだと言つた。眞當か嘘か知らないが祖父は狐につかれて死んだと言ふ話もあつた。猪吉の父が十の時には身内の者といつては誰もなかつた。唯一人伯母が世話をしてくれたのだが、何といつても女手で、財産は何時のまにか他人の手に渡つた。父も激しい氣象で随分家運の挽回は計つたが、その割に金錢には恬淡で人から欺される事が多かつた。金を借して戻らなかつたり、保證人になつて巻き添へを喰つたりした事も一再ではなかつた。その度毎に猪吉の母と激しい不和ができた。始めの頃はさうした不和にも氣付かずに過したが、中學に行く頃になると段々目に見えて來た。それと同時に、不和と言つても事件が起る度に蒸し返されるだけで、初めから二人の間には救へない溝がある事はつきりして來た。その溝も年が経つにつれて段々深

くなるのではないかと思はれる節さへもあつた。母の卑屈に近い陰氣なおとなしさに不満な父親は、勢ひ他の女とも交渉があつて、ある女に子を生ませてゐた。そんな事で二人はとう／＼感情を外に出して争ふやうになつた。責任感の強い父は女を捨てゝるやうな事はしなかつた。母親の妨害にあつても出来るだけの世話はしてやつた。母は「こんなきりつめた生活からあんな女に貢ぐとはあきれた父親だ、あれはもう家の事も猪吉の事もかまひはしないのだ。自分の子より女が可愛いと見える」と聞くに耐へないやうな言葉も聞かねばならなかつた。それを父親の前で言ふ時父親はむつり黙つてゐた。子供に聞かせたくない話を聞く男親の氣持は猪吉にもわかつてゐたし、それを承知で言ふ母親の嫉妬めいた氣持も胸にこたへた。美しい母親だと思つてゐたものが、そんな言葉に出逢ふと子供らしい空想なんか一遍に吹つ飛んでしまふ。中學時代からそんな環境に育てられた猪吉は子供から大人に一足飛びの偏跛な成長をした。始めの頃は猪吉も複雑な大人の世界に飛んで、二人の和解の爲に涙ぐましい努力をしてみた。まだ夢を見てゐるやうな少年の頃からそんな事で苦勞しなければならぬ事はつらかつたが、母の可哀さうな氣持も父親に知らさうとしてみたり、父親の外出を止めようと骨折つた事もあつた。然し父親は母の嫉妬に耐へないと言つた。母は一徹に父親の冷酷さをなじつた。結局和合する事のできなゝ二人だつた。二人の間にあつて猪吉が一番損な立場にあつた。學校で勉強しながらも心の中はいつも暗かつた。彼は父親を憎み女親を怨む氣持になつた。二人の口論を止めながら何度涙が出かかつた事か。その場で父を打ち据えてやらうと思つた事もあつた。子として言つてはならない事が言へない爲に、ふとんの中で泣きたいのを我慢してゐた事もあつた。思ひ餘つて「俺は學校を止める」と言つた。猪吉の母は泣き出して「お前がそんなに言ふなら、私はもうお父さんに何も言ふまい。私が懲へてゐたらいゝんだから、私一人悪人になつて。」

どんな猪吉の努力も無駄だつた。この頃から猪吉は、憎んだつて怒つたつてどうにも仕方がない。どうせなるやうにしかならないのぢやないか。夫婦の争なんか犬にでも喰はれてしまへ、とさうした不貞腐れたやうなあきらめを憶へてしまつた。惱んだり悲しんだりした分が結局損だ。俺は自分一人で生きるんだと決心した。この世で頼れる者は親でも兄弟で

もない。頼れものはたつた一人——自分なのだといふ意地強い思想を引つ提げて、猪吉は全ての者に反抗して行つた。人間があきらめたら強くなるやうに猪吉の反抗にはあきらめから湧き上る強さがあつた。華々しさのない代りに陰氣なあくどさがあつた。爆發する力の代りに忍従的に反抗してゆく力があつた。「俺は金持と偽善が嫌ひだ」といふ彼の言葉は猪吉の生活から來た生々しいものだつた。

猪吉は屈せず勉強した。勉強して勉強して級友の皆を見返してやり、自分を皆より一層高い地位に置かうと努力した。勉強よりしない彼を誰かが紙魚と呼んだ時でも、彼はそんな者に何ができるとうそをぶいた。かといつて勉強が好きだつたのではなく、慰むる事のない鬱憤を僅かにさうした虚榮で満してゐたに過ぎなかつた。一度その事に氣付いた時虚無感が猪吉の頭を吹きまくつた。今まで勉強したのは何の爲だつたのか、そしてどんな俺が偉くなつたのかと自省してみると、勉強する氣にはならなくなつた。馬車馬式に勉強した過去が馬鹿らしくなると、今まで持つて來た孤獨感が頭を擡げてどうにもならなくなつた、その時知つたのが道夫だつた。性格的には違つた二人だつたが、極端な點では似てゐた。道夫は猪吉程に現實的に反抗する意力は持たなかつたが、始めから落着いた處世觀と云つたものを持つてゐた。道夫は暮す事だ。泣いても笑つても人生だといふのが道夫の持論だつた。始めその享樂的な逃避的な態度には猪吉も嫌悪を感じたが、道夫の享樂的な生活に一種の透徹した人生觀を見た時猪吉は蒙を啓いた。道夫の享樂といふ意味は決して不徳義なものではなかつた。道學者流の固くるしい思想より却つて徳義的には合理性があつた。「人間は限度を守りさへすればいゝんだよ」と道夫は言ふが、その影にも一種の淋しさがつき階つてゐた。道夫も亦養子といふ身分で眞當の肉親の味ひは知らなかつた。道夫と猪吉はこんな點で共鳴した。

西風が強く吹きまくつて白い砂塵を其所彼所にまき起しながらその度に道行く人の足を止めさせた。道夫は病院に通ずる橋を渡りながら病人を見舞ふに凡そ似つかはしくないやうな楽しい氣持だつた。濁つた水を眼の下に眺めて白い病院の門柱に向ふと、自分が天國の門に向つて飄々と歩く放浪者と言つた感じがした。それに放浪者と言へば林芙美子の放浪記

が好きで、あの本が好き人間は自分が好きな人間だと心決めてゐた頭が思ひ出されて微苦笑に似た氣持だつた。突然吹きつけた砂塵に顔をそむけた時、後ろから若い女が傘で風をよけながら通り越して病院の門の中に消へた。誰かに似てゐたと思つたが道夫が玄關を入るとそんな事は一切頭に出て來なかつた。リゾールの匂ひかあの匂ひを嗅ぐと夏でもうすら寒い思ひがしてならない。不吉な豫感とでも言ふかそんな種類のものである。猪吉の室の前まで來るとスリッパが一足綺麗に並べてあつた。誰か來てゐるなと思ひながら立止ると中から女の聲がした。その時道夫はすつかり呑み込んだ。さつき似てゐると思つたのは猪吉に似てゐる女、恐らく尙子といふ女だらう、尙子といふ女が猪吉とどんな關係の女か知らなかつたが兎も角その女に違ひないと思つた。

割合に強い光線が窓の外に輝いてゐた。女が持つて來たのか切花が窓邊にあつた。猪吉が「はいれ」と目で會圖した。女は薄色のセルかなにか娘らしい派手な着物を着てゐたが女も頭を下げた。「尙子だよ」猪吉が言つた。「さつき門の前で會つたが、だらうと思つた。さう言へばお前に似てゐる」「さうか、妹だよ」猪吉が云つた時女が顔を赤くしたのを道夫は見た。眞當の妹が居るわけはなかつたが、あるとしたら猪吉がいつか話した妾の子だつたのか。道夫は突蹉に自分の推理をかう決めて女を見た。都會人に見るやうな鋭い神經質な所はなかつたが女から發散する意力は道夫も感じた。

窓の外は芝生で垣根越しに往來が覗いてゐた。「羨しいねあんなのは」その場を何と言つていゝか見當のつかなかつた道夫は垣根越しに通る子供連れの夫婦を見送りながら言つた。猪吉もベッドからちよつと頭を擡げたが「ふん」と自嘲したやうに、「お前は子供が好きなのかい」と案外な面持だつた。「あゝ俺は早くあんな身分になつて身を落着きたいね、子供でも持つて」猪吉は枕許の檢温器を取り上げながら、「子供持ちたいなんて俺には想像もできないね、俺なんか戀愛の事は考へても子供の事考へるとぞつとするよ。まあ子供は仕方ないとしても、腹の大きな女なんか見ると實にいやな氣持なんだよ。人間のあさましい半面を見せつけられたやうだね」「俺はさうは思はないね、子供持つたら又人間は別な世界に住むものだよ、勿論厄介な事は厄介だらうが、子供によつて新しい處生觀が生れる事は事實だね。」「本氣でさう思ふの

か。「勿論さ、嘘を言ふ積りだつたら子供は持ちたくないと言ふだらうね。俺は平凡でもいつからとも角安穩に暮したいんだ。」猪吉は検温器を腋に挟みながら、「俺は身体が本當ぢやない、だからさう思ふのかも知れないがね死んだつていゝからと本氣になつて思つてゐるんだよ。今はもうそんな馬鹿げた感情は努めて出さない事にしてゐるのだが、つひ感情的になつて了ふんで困るんだよ。感情的と言つても神經ばかりのやうなものだが、芥川なんかも神經ばかりで良心の良の字もないと言つてゐたね。所が俺には良心があり過ぎて困るんだ。」道夫は落着いたと思つてゐた猪吉にも、まだこんな若さがあるかと奇異な感じがした病氣の故だなど頭にびんと來た。

「窓を開けようか、少し風が強いが」「うんさうしてくれ」猪吉は少し上氣した頬を撫でながら、道夫が窓際に行つてゐる間に、「尙子、お前はどう思ふかね、子供は好きかね、持ちたいと思ふかね。」尙子は割合はつきりした口調で、「子供を自分で持ちたいなんて、考へてみた事もありませんわ。」猪吉はその時も自分と道夫との性格が違つてゐるのを感じたと同時に、自分の性格の脆さといつたものも感じた。猪吉の性格をこんなにしたものは、見苦しい現實から逃げて來た過去の生活と、それから——苦い思ひ出だつた。愛を求める求道者となつて求め得たと思つたものは凡そ現實的な女の横顔だつた。にごつた銀のやうな女の顔、感溺した日の累積と空しい虚無感、それらはみんな自分の性格に集ごもり、逆に自分の性格がこんな現實としてあらはれてゐたのだつた。

「今何所に居るのかね。」

青桐の幹にはね返る眩しい日差しを、言つてしまつた彼の落着いた氣持で眺めながら猪吉は尙子に問ふた。

「峯伯母さんの所によ。」

「家に来ればいゝに……」と言ひながら不可能な事を言つてゐる自分に氣付いて口をつぐんだ。峯伯母さんと言ふのは尙子の母の姉で、待合のやうなものをしてゐた。

「態々見舞に來てくれたのかね」

「それもあるけど少し兄さんに相談したい事もあつて。」尙子は何か道夫に氣兼ねしたやうな様子だつたが思ひ切つたやうに

「いつまでも田舎に燻つてゐたつて仕様がないので此頃自分で身の振り方位決めてゆきたいと思つてゐるの。」

「してどうする氣なんだ。」

「私はタイプでも習つて會社にでも勤めてみたいのよ。峯伯母さんは私を世話してくれると言つて下さるし、さうしたらお母さんも峯伯母さんの所ででも働けばいいんでせう。」

「お前は何時までそれがやつてゆけると思ふのかい。尙子もなるだけ世間の事は知らないがいいんだよ。それで一生を通す積りぢやなからう。」

「私達は併し贅澤はできませんの。遊んでゐるのは心苦しいんです。お母さんが可哀さうな氣がして。」

話が家庭的に事になつたので道夫が氣を利かして出ようとした時検温器をもとの所に返してゐた猪吉が、

「いゝんだよ、お前にも聞ひて貰ひたいんだ」さう言ひながら噛み含めるやうに、

「尙子は、お前はそれで若さを犠牲にしようと思えのかね」尙子は下を向いてゐたが、考へるやうな低い聲で、

「犠牲なんて事は少しも思ひません。私は大体から犠牲といふ言葉が嫌ひですの、たゞ私は自分がいゝと思ふ方向に進んでゆきたいのです」

「さうか」

猪吉は言ひたい事は澤山あつたが暗い氣持がして言へなかつた。去年父が腦溢血で死んでから後は一層、尙子と猪吉の母との仲に深い溝が出来てゐた。父の遺言によつて財産の一部が尙子に遺された事が母の心をひどく損つたらしかつた。これまで猪吉は何度も私生子といふ尙子の前途を思つて、母に籍の事を頼んでみたのだが一徹な母親はこの事はかりは頑強に反對した。「それぢや父の不行贖を世間に廣告するみたいですよ。あなたもそれで恥づかしくはないのですか。そ

れにね親類とか何とか、うるさいからね」と母親は言ふのだつたが、猪吉の氣持としてはそんな世間的な事よりも、一人を救ふ事の方が大問題だつた。同じ血が流れてゐるだけに、尙子を世間に出して働かせたくはなかつた。自分は入院までしてゐると思ふと心苦しさが先にたつた。

尙子が歸つてからも道夫は暫くはぼんやりしてゐたが、

「どうするんだ」と聞ふたら、猪吉は「病院を出る」と言つた。道夫は突然猪吉がそんな事を言ひ出したのでびつくりしたが、猪吉は落着いた口調で、家にも學費の他に餘裕のある金はないし、どうせこんな病氣は安靜にしてゐればいゝのだから、猪吉も贅澤言はずに家で養生すると言つた。その方がいゝやうな氣になつた、との事だつたので道夫も反對する所はなかつた。その日の中に病院を出たが、夜道をタクシーで歸りながら、猪吉は

「折角親しくなつた看護婦さんに、金銭上の問題で別れなければならなかつたのは苦しかつたよ。俺も案外見榮坊だつたんだな」と淋しさうに笑つた。俺は金持と偽善が嫌ひだよと言つてゐた彼の言葉を思ひ出して、金の事で苦勞してゐる猪吉の心を測りながら、道夫はそつとその白い顔を透して見てゐた。

道夫は遂吉に頼まれて、翌朝尙子に電話を掛けて猪吉が退院した事を知らした。始めお内儀らしい人が電話口に出て、誰方でせうか、と多少うさん臭さうな口ぶりだつたので、矢部ですがと言へば、あゝさうですかと直ぐ尙子らしい彈力のある聲が受話機に響いて來た。「兄さんの」道夫はどぎまぎしながら

「いゝえ矢部の友達ですが、頼まれました、昨夜退院しましたので」

「退院ですつて、どうかしたんですか」

「そんなわけぢやないんです。退席になつたんでせう、あそこが」

「身体はいゝんでせうか」

「大丈夫でせう」聞を置いて、

「私今日は田舎に歸る積りだつたんです。私も急に用事ができて、母が病氣ですの。兄さんにはさう言つて下さいませんでせうか。又近い中に參りはしますが」

「お悪いんですか」

「いゝえ、いつもの病氣でして心配する程の事はないのですが、一人居ますものですから」

「何時お歸りですか」

「晝の汽車で歸ります。兄さんにどうぞ宜しく。あゝそれから昨日の田島さんでせう。昨日は失禮しました。變な事をお聞かせしまして、驚きになつたでせう」

「いゝえ」

道夫は受話機を置きながら自分の名前を知つて呉れてゐた尙子に好意的な氣持にふと支配されて、環境の精か何所か凛烈とした所のある尙子を珍らしい女だとも思つてみた。ほつとした氣持で公衆電話を出ると後から誰かに呼びとめられた。誰かなと思つて見ると久美だつた「元氣かね」と言ふと、女は言ひ難さうに「あの矢部さんは……」と聞ひた「矢部は昨日退院したばかりだが、然し心配する程の事はないよ」と道夫は眞當の事を言つてやつた。女は肩を押せて暗い顔をしてゐたが「お悪いんでせうね」と納得のゆき兼ねる風だつた「君にも責任がないとは言へないね」と言へば怒つたやうに横を向いてしまつた。まだ子供らしい所がありながら、大人のやうな風や言ひ方をすると言つた感じのその女は、パーマメントをかき上げながらませた口調で「どうせ私達が悪いやうにばかりなるんだから、つまらない」と眞當に怒つてゐるらしかつた「まあさう怒るな」と笑つて見せたが女は笑ひもせず電車道を横切つて行つてしまつた。

夜猪吉に會つた時道夫はこの事を言つてやつた。猪吉も聞き苦しい風だつたが、

「悔める氣持はないが考へると苦しいよ。嫌ひぢやなかつたのが、あんな風な別れ方をして俺は自分で身体を壊してしまつたのだからな。」

「そんなに思つてゐたのかい。」

「はずみさ。はずみで好きになつて、はずみで別れてしまつた。自業自得と思つてゐるよ。この頃はとに角深刻に考へる事がいやになつた。何でもかでもどうにかなつてゆくよ。」

「好きなのだな」

「嫌ひぢやない。それだけだよ。それ以上は考へない事にしてゐる。この頃はとても神經が疲れてゐるんだ。時々耳の奥でじん／＼鳴る事があるんだ……。蟲の聲がしないかね。」猪吉は突然こんな事を言つた。道夫はきゝ耳をたてたが何にも聞へなかつた。

「氣の精かな」と猪吉は仰向けに身体を伸ばして「とに角こんな風だから困るよ。」と笑つた。道夫は勵ますやうに

「あんまり氣を使はない方がいゝね」と言つてやつたが、それには答へず

「尙子も世話してやりたいんだが。」

「どうする氣なんだい。」

「籍だけでも入れてやりたい。」

「お母さんは?。」

「駄目だよ、今日も話してみたんだが、やつぱし駄目だつた。それに今迄はこつちの事ばかり考へてゐたんだが、問題は尙子の母の事もあるのだらう。承知するかどうかもわからないし、病身だから仲々手離すまいと思ふんだ。」

「どんな女の人だ?。」

「藝者だつたんだよ。だから、とても意地が強いんだ。母と和解なんて出来つこないよ。」

「ちやどうしても駄目なのかい。」

「そんな事はない。戸籍の事なら俺に戸主としての権利があるから、どうにかなるだらうが問題は愛情の問題さ。どうして女つて、かう心が狭く出来上つてゐるかと思ふと情無いよ。僻んでゐるんだよみんなが。」

「……………」

「俺自身が僻んでると言ひたいんだらう。さうだな俺だつてまともな考へ方はしないかもしれないが、自分ぢや僻んでなにかゝる積りなんだ。今度の事にしてもさうなんだ。」口では強い事に言つても水底から湧き上るやうな微笑さへ浮ばせて言ふ猪吉に、道夫もついり込まれて

「君がさう言ふなら俺だつて言ふがね、お前はあんまり焦り過ぎるからいけななんだよ。長い眼で見てください。どうにか解決がつくものだよ。」

「残念だがそれが出来ない。此頃急に焦つてね、かう何時までも遊んでゐるわけにもいかないし、懲へるといふ事がとても出来なくなつた。こんな事でどうする、といつも思つてゐながら、やつぱしいけない。身体がかうまで心を弱くするとは、今まで思はなかつた。新しい肉体が欲しいなと、磨擦音の聞へる度にさう思ふね。」

運命といふ手から貰ひ受けた同じやうな苦しみを、自分自ら過重にしてゆく人間があるとしたら、傷ましい代りに人生を涙で噛み分けてゆくやうな、そんな人生の辿り方をしてゆくものではないか。一度は頬をなぐられて土に塗れる事があるかも知れない。然し起上つて又——何度同じ事が繰り返されようと、青白い顔して向つてゆく傷ましい生き方。死ぬ一瞬前までも反抗を忘れない、そのいちらしい苦惱にも、捨てきれない未練が纏ひつくかも知れない。猪吉のやうな人間がさうだつた。道夫も亦同じ都會の子として、この複雑な心理をどう扱つてよいかわからなかつた。

「そんなに悪いのか、なら病院に居ればよかつたに。」そんな時の言葉の空虚さは、言つてゐる道夫自身も氣付いてゐた。説いて聞かせようといふ氣持よりも、言葉の無力さを信じる氣持の方が強かつた。

「考へてみれば、悲觀する程の事はないんだ。」猪吉は瀬音のやうな淀みない口振りで
「心と神経が別々なものと考へてみる事出来る」とすると、俺の心は神経で見えなくなつてゐる。まあ、そんな状態さ。
その上神経はいつもびく／＼と動いてゐるのだが、心は案外落ち着いてゐるんだ。いつもかうだつたんだが、此頃は殊にひ
どい。まるで神経で包まれた蓑蟲みたいだよ……。蟲の音がするね。今度は眞當だな。ほら、聞えるだらう。」
「秋だな、秋だよ。」と道夫も薄暗くなりかけた庭の八手に感慨をこめて言つた。

右肺浸潤と聞ひた初めは、安暗したやうな氣持であつたのが、病氣といふ重みが磐石のやうに頭を抑へてゐるのに氣付
くと今更のやうに、いたゞまらない焦燥を感じ初め、それが恐怖に變り絶望を招いた。此頃では毎日のやうに夢を見る日
が續いた。昨夜も、仰向けとなつてゐると天井の節穴が次第々々に擴がつて、其所から鈍い光りのメスが下りて来る。時
計の音が一秒を刻む毎にメスは身体に近づいて来る。身をよぢらせようとしても身体は釘付けされたやうに動かない。懸
命になつて避けようとしたがメスは用捨なく猪吉の右胸にじつと突き刺さつた。思はず——自分の擧げた聲の大きさで我
に歸つたが、恐ろしい幻想を追ひかけるやうに右胸が疼いてゐた。久美の顔も見だし、京都に去つた友達の顔もはつきり
見た。甘い空想はシャボンのやうに消え、濁つた久美の卑屈さや、あれ程信じてゐた友の手紙一つ寄越さない冷たい眼に
猪吉は暗澹とした氣持になつた。反撥しようにも、さうした友や女の態度は逆に猪吉の心を責めるだけだつた。

日記はブランクの日が續き、空白な毎日目的と意志とを完全に欠いで來た。何の爲に、何をして生きてゐるのかわか
らないまゝに、寢ては起き、起きては當もなく街に出て行つた。その擧句綿のやうに疲れた身体と心を懐きながら家に歸
つては、冷い床の中で今日の悔恨を繰り返す。親切にさるればされるだけ、それだけ馴染めない母親や、生活の苦みに喘
ぐ家庭を、せめて脱れようとして出てはみても、街には憤慢すべき偽善が、空々しい失望が散亂してゐる。

尙子が歸つたといふので猪吉の勢ひが又挫けた。打算のない愛に浸つた事のなかつた猪吉にとつて尙子は唯一人のなつ

かしい肉親だつた。猪吉が又昨日の悔恨を繰り返してゐた時——それはかうだつた。久美と會つた。猪吉は斜に久美の視線があると知りながら黙つて離れた。俺の蒼白な顔で久美の心をかき亂せばそれでいゝ、然し今となつてあんな別れ方が卑屈な俺の曲つた根性の故かと、ふと暗くなつたが——その時母が手紙を持つてきて呉れた。

「尙子からぢやなくつ」

猜疑に満ちたとげ／＼しい母の言葉を黙つて受流して手紙は取つたが、すぐ讀む氣にはならなかつた。母がそんな態度に出れば出る程猪吉も素直には出れず、手紙に何の關心もない風を裝つて、

「頭が痛々」

と手紙を枕の下にぶりこんで睡いと言つた。母が去つてから暫くして、猪吉は青白む氣持で封を切つた。

これまで自分で悟つたと思つてゐた氣持は、些細な感情にも砂丘のやうに容易に崩れ落ちた。その果には眞當に悟つたといふ氣持が人間にあるのだらうかとそんな事まで考へ、悟つたといふ人の假面が氣になりだし、人間といふ煩はしい感情をもつたものが全体から嫌になつた。口をきく事がいやになつた。人にも會ひたくなかつた。それがふとした時——体の調子がとてもよくなつた時等、湯煙のやうな希望に満たされる事があるのだが、又ぼかんと破れては此頃急に夢がちになつた自分を自嘲したくなる。尙子の件も駄目だつたし、學校にも休學届を叩きつけた今、猪吉は狂つたやうになつた。街に出て誰からか「身体はどうです」と聞かれても素直に受入れる事もせず、ふん他人の事も思ひもせぬ癖に、思つてやるやうな慈善ぶつた口をきいて貰うまいと「まあいゝ方です」と答へて、それが本當だつたら、と云はれない前より一層苦しい思ひをする。子供を見てもその子供が苦しむ位なら死んだ方がいゝのだがと、本氣になつて汚い子供の顔を覗き込んだりした。そして子供に泣き出されて顔を赤くした事もあつた。

むき出しの神經のやうだよ蒼い顔

猪吉はそんな句をひねくつては、社會といふものに鋭い神經を向けるやうになつた。そして自分のやうな人間ばかりが居たら、世の中は一体どうなるだらうかと恐しい氣もした。悪くはなつても良くはなりさうになかつた。

母を看ねばならなかつた尙子は伯母の家に來る事を斷念して、田舎で代用教員の職を見付けて働く事になつた。つらい事なんかありません。いゝ人生修業だと思つてゐます。と尙子は言ふけれども、人生の裏を知りぬいた猪吉は、尙子にそんな修業をさせたくなかつたが、いざとなつては黙つてゐるより仕方がなかつた。それに尙子に誘惑の手が伸び——そんな妄想まで起るのだが、取越苦勞だと笑つてすまされなかつた。

私は本當は兄さんに繼つてみたかつたのです、がそれが兄さんの家を棄すと知つた今、私はやつぱし一人で生きます。私は私生子です。然しそれがどんなに悪い事でせうか。又私がどんなに悪い事をしてゐるからさう云はれるのでせう。社會的に容れられない事は知つてゐます。けれども私はそんな人を相手にして生きてはゐません。私は一人で生きてゐます。せめて兄さんが何所かで心配してゐて下さると思ふと、心強い氣がします。私も女です。女のセンチだと笑はないで下さる。

猪吉は手紙を置いて考へ込んだが、坑道を通り抜けて行くやうな、ジーンとした氣持が指の先まで響いて來た。生きるといふ事。自分はその生きるといふ事をそれ自体を忘れてゐたのではなかつたかと、以前の逞しい生き方に歸つて行く、それよりか進んで行かねばならぬ自分といふものを感じた。

(追記。自分で解決できない問題を背負ひながら、小説にのみ解決をつける事は現實を冒瀆するやうな氣がして止めた。又改めて稿を起す)